

天才を諦めた家政婦と普通を求める天才

おいしい煎茶

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

周囲の天才に心を折られた青年は普通を欲する彼女と出会い、浸り、変わる。

『普通』について考えてみたい男女の話

広町七深の過去になんかありました。ちょっとシリアスかもです。

処女作です。頑張って続かせるつもりですが不定期にはなると思います。

よろしくお願いします。

目次

第一話	1
第二話	7
第三話	11
第四話	15

第一話

濁った東京の空のもとで今日も中古の原チャリを走らせる。車体価格わずか3万円のおんぼろは今日も燃費の悪そうな音を響かせている。背中には配達用の大きな長方形のバッグ。黒地のバッグの中央に蛍光黄緑の社名がわざとらしく輝いている。

26歳の誕生日はこれまでと変わらず空模様のように薄曇りのまま過ぎていくのだろうと思っていた。

有名大学に進学し大手企業に就職したが、周囲の天才と自分の非才を比べ、何となく生きがいを見出せない日々嫌気がさしてわずか一年で退職してしまった。そこから今はやりの日雇いの配達員として日銭を稼ぎながら何も生む出すことのない日常を送っている。

自分の意思で仕事から逃げたにも関わらず特別なことは何もしていない。

空虚な毎日をひたすら再生産しつづけている。

「すみません。配達に上がりました。」

「あ、やっと来た。お兄さん、いつもありがとう。」

「道路が混んでまして。いつもお世話になってます。」

マイペースな性格なのだろうとはつきりわかるような声とピンクの髪が特徴的な女性の元に今日も配達をした。一回当たりの値段が安くないこのサービスを朝昼晩と利用する変わった人だからすぐに覚えて顔なじみとなってしまう。

配達するたびに雑談する程度のなかにさえなりつつある。

「いつも思うんですけど、お金もつたいなくないですか？いや、このサービスで稼いでいる自分が言うのもおかしい気はするんですけど」「めんどくさくってさ。『普通』じゃないんだろうけどね」

なぜかひどく自嘲気味に笑う彼女を少し不思議に思いながらもそうですかとだけ返した。

そしてその日はそれ以上詮索することなく次の配達先に向かった。

—————

翌日もけなげに配達を行っていた。何せまともな収入源はこれだ

けである。奨学金を返済しながら都内で生きていくためには働くしかない。企業に勤め続けていれば、と過去の自分を呪ってしまう後ろ向きな発想になるのは今にも降り始めそうな重苦しい曇天のせいだろう。

いつもの女性の元に配達に向かう途中、夜になってついに降りだした雨はますます嫌な思考を加速させた。

「くそつたれ、ばかばかしい」

誰に伝えるでもなく吐き出した悪態は雨音に消える。

朝からゴミ出しを忘れたり、朝の占いの順位が最下位だったり、なんとなく髪型が決まらなかったり。そういう有形無形問わない違和感がイライラを増幅させているように感じる。

逃げた先の人生でなおも満足な人生を送れないとは、なんとも滑稽な話だ。

「ああ、くそ。今日は何やってもダメな日だ。さっさと届けて帰ろう」
降りしきる雨の中ぶつけどころのない気持ちはむしろ自分の無力感をはつきりさせる。

逆に曇り空は好きだ。皆一様に傘を差し、うつむきがちに速足で歩く。

世界が均質化されてこの世から不平等がなくなったような気分になる。我ながらなんとも退廃的な発想だ。悪平等など何も救わないということは今までの短い人生から大いに理解している気である。だからこそ才能のある人間には尊敬も嫉妬もするのだ。自分んはどこまで行ってもそこにはたどり着けないと気が付いてしまってるから。

ずぶぬれのまま女性の部屋のインターホンを乱雑に押した。濡れた前髪が額にかかってイライラする。商品を渡してさっさと帰ろう、部屋に食べ物あつたかなと脈絡のないことを考えながら待っていた。

いつもの女性が顔を出してありがとうと柔和な笑みで商品を受け取った後

「わ、ずぶぬれだ。お兄さん、よかったらシャワーでも浴びて帰ったら」

「え？」

「なんだか事態はよくわからない方向に転び始めていたようだ。」

「いやいやそんな！悪いですよ！どうせ替えの服もないですし！」

「必死に首を振って断ろうとするも、彼女は食い下がる。」

「いいじゃない、それくらい。ノブレスオブリージュってやつだよ」

「ヨーロッパの貴族か何かなんですか、あなたは…」

「まあね。あながち間違っではないかなあ」

彼女は昨日『普通』という言葉に触れたときと同じように、最後の言葉は何となく自信なさげに聞こえた。触れてはいけないパーソナルな部分に踏み込んでしまったと察した僕は少しひるんでしまった。そのすきを彼女は見逃さなかった。

「とにかく！入った、入った！」

「わ、わかりましたから押さないでください！」

マイペースのように見えて、実はかなりしたたかな人物なのではないだろうかと背筋の寒くなる思いがした。今日は仕事を早めに切り上げようとしたツケが回ってきたのだろうか。

お邪魔しますといって女性の部屋に入る。何度も食事を届けて見慣れたはずの玄関をくぐるのはなんだか変な気持ちになった。外の暗さから部屋の明るさに目が慣れてくると、少しづつ中の様子が分かってきた。

ゴミ、ゴミ、ゴミ。

どこを見回してもゴミだらけだった。3台も設置されているディスプレイとやたら高価そうなベッドの周辺以外はおおよそ人間が生活できる環境ではないだろう。パソコンの低く鈍い駆動音が家具らしい家具のない室内をより無機質なものに感じさせる。

「なんなんですか、この部屋…」

僕は混乱気味に、質問するとも独り言ちるとも言えない声でつぶやいた。

なぜ自信満々に人を部屋にあげたのだろうか。毎日宅配を利用する資金力から多少なりともきれいにしているとばかり思っていた。

汚れた部屋が過去のいやな記憶を引きずり出そうとする。

「家事、全然できなくてさ。いや違うか。できるんだけど、やっても仕方ないからやらないんだ」

「そう、なんですね…」

「部屋なんていいから早くお風呂入っちゃいなよ。その間に乾燥機かけとくし、使つてないシャツとか貸すから」

彼女の勢いに負けてそのまま風呂場に向かった。やはり最新式のシャワーや一人暮らしにしては大きいバスタブなど彼女がある程度裕福であることが様々なところから感じられた。何をしている人なんだろう、という疑問が頭をもたげた瞬間に彼女のあの辛そうな表情が思い出され陳腐な野次馬根性は胸の奥にしまった。

風呂から上がり用意してあったバスタオルで体をふく。自分の家のタオルとは違う甘いにおいに気が遠くなりそうだった。

「お風呂いただきました」

彼女はキーボードを動かす手を一瞬とめると、はいといつもの気の抜けた返事をした。そしてまたすぐに自分の作業に戻ってしまった。

「…この後どうしますか？」

僕は所在なさげにそうつぶやくと彼女は食事でもしようかと動かす手を留めず提案する。なんとも自分勝手な招待主だと困惑していると、カターンとひときわ大きいエンターキーを叩く音が響いた。

そしてぐるりと大きめの回転椅子を回すと、ぴよんと椅子から軽快に飛び降りた。

夜にも関わらずなんともアグレッシブな家主である。

「お寿司と中華、どっちがいい？」

「…多分ですけど、出前の話ですか？」

「もちろんだよ。お嬢様でも出前くらい注文できるよ」

「いえ、別に疑っているわけではないですけど。じゃあ中華で」

僕はメニューの中で最も安いラーメンを注文し、彼女は聞いたこともないような炒め物セットを頼んでいた。

普段は出費を抑えるために自炊生活を送る僕にとっては当たり前のように出前を注文しようとする彼女とやはり住む世界が違うのだ

と感じた。一人鼻歌を歌いながら最新式のスマートフォンを操作する彼女に何となく羨望とも憧憬ともつかない気持ちになったのはなぜだろう。どうしようもなく自分にはもっていないものを全て持っているような直観がしてしまった。努力から逃げ、せこせこ日銭を稼ぐ現在の自分と会社を辞めることなくある程度自由の効くお金を手にしていたかもしれない仮定の自分。

他人の家においてもどうにもならない自傷に走ろうとする精神に我ながら辟易とする。

彼女は我関せずといった態度でスマホをいじっているから特に問題にはならなかったが。

その時ピンポンと軽快な音が部屋に響く。出前が届いたのだろう。いつもは自分が押しているはずのインターフォンを他人が押しているというのはなんとも奇妙な気持ちである。

二人で食事を始め、僕はかねてから質問したかったことを彼女に投げかけた。

「なんで、ここまで僕によくしてくれるんですか？食事代まで出してもらっちゃって」

「お、お兄さんのほうから本題に入ってくれるとは嬉しいな。実はねお兄さんのことを利用させてもらおうかと思ってるんだ」

思いがけない発言に僕が眉をひそめていると、彼女が言葉をつづけた。

「見ての通り私の部屋、汚いでしょ？その掃除をしてもらいたくって。もちろんバイト代は出すよ？いつも身なりをきれいにしているお兄さんならきつと生活力高いだろうなと思って」

彼女が差し出したバイトの条件が書かれた紙を見て僕は仰天した。

「いや、こんなにいただけじゃないです！それに僕は特別家事ができるとかではないので！」

「そうかな？いつもシャツの襟もとはきれいにアイロンがけされてるし、肌やつめの状態も良いから栄養もしっかり取れてる。でも仕事のお給料はそこまで良いとは思えないからうまく家計をやりくりしてるんだろな。言葉遣いからそれなり以上に学のある人だろうな」

てわかるよ。会社を辞めたは良いけど次に何がしたいか分からない現状って感じかな？」

「…っつ!!」

「…信じられないし気持ち悪いよね？でも私は『普通』になることを諦めたわけではないから」

これは脅迫だ。ここまで自分の境遇を見破られて僕に選択権などあるはずがない。断ればどんな法服が待っているか分からないような底知れぬ恐怖を感じる。

でも僕にも意地がある。

「わかりました。でも条件があります」

「うん？なんでもいいよ、言ってみて？」

「このお給料をいただくのでしたら、あなたの家政婦として雇っていただけませんか。そうでなくては釣り合いが採れません」

この天才に一泡吹かせてやるのだ。

「ふふっ、あははは!!お兄さんおもしろいね〜自分から雇用条件を厳しくするなんて想像できなかったよ。やっぱり世間の普通は難しいなあ」

「では認めていただいたという認識でいいですね？」

「わかったよ〜お兄さんは今日から私の住み込みの家政婦ってことだね」

「はい、そのように…え？住み込み？」

こうして天才を諦めた家政婦と普通を求める天才の奇妙な生活が始まった。

第二話

彼女、広町七深の家政婦となっておおよそ一週間。

もともと住んでいた家を引き払い様々な手続きを終えたところである。今日から本格的に家政婦として働くことになる。正直計り知れない不安がある。何せこの前まで単なる客と配達員の関係に過ぎなかった男女がなぜか一緒に住むことになっているのだ。

数少ない友人に事の顛末を伝えると「完全にヒモじゃねーか」とうらやましがられてしまった。友人の指摘は最もだ。世間一般的にこの関係はどのように映るのだろうか。

大学を卒業しながらフリーターをやっている自分にいまさら世間体なんてものが存在するのかわかると言われてしまうとそれまでではあるのだが。

家具などは引っ越し業者のひとがすでに運び込んでくれているらしい。

手荷物だけ持って彼女の家、ただし今日から自分の家でもある部屋の玄関をくぐる。

「お邪魔します…」

おずおずとドアを開けると目の前に家主、広町七深が腕組みをして仁王立ちしていた。

「よくきたね〜広町は待ってたよ〜」

「お世話になります。これからよろしくお願いします」

「こちらこそだよ〜家政婦のお兄さん。よろしくお願いしますね」

育ちの良さがわかる丁寧なお辞儀となんとも言えない砕けた口調がむずがゆくなった。これから僕は彼女、広町七深の家に住み込む形で家政婦として働くことになるのだ。なんとも変わった状況ではあるが、この顛末はなぜ自分でもこうなったのかきちんと理解できていない。

「ではさっそく掃除させてもらいますね」

僕は家政婦としての職務を全うするために仕事にとりかかろうとする。

しかし彼女は僕の腕を突然がしつと捕まえると

「よし、じゃあ海に行こう！」

「いや、なんで?!」

またしても僕のあずかり知らないところで事態は動き始めているようであった。彼女は自由奔放な性格をしているとうすうす感じてはいたが、その自由度ははるかに僕の創造を超えるものだったようだ。

彼女の車を運転することしばらく、江ノ島についた。

彼女の家に着いたのが昼過ぎだったため現地に到着したのは夕方だった。車を駐車場に止めドアを開けると、強い海風が吹いた。

彼女の綺麗な髪がさらさらと流れヨーロッパの有名な絵画のようにさえ見え、夕焼けに映える髪色だと茫然と眺めていた。

「どうしたのかな、お兄さん？早くいこう？」

はい、と答えた声が少しかすれていたのはきつと潮のせいだろう。

—————

江ノ島周辺を二人で特にあてもなくぶらつく。

はたからみれば完全に付き合っている男女だろうが、その内実は雇用主と労働者である。しかも会話の内容はなんとも無味乾燥だ。

「帰ったらまずはキッチンの掃除からですね」

「じゃあ私は残ってるお仕事やっちゃおうかな」

「わかりました。6時過ぎには食事できるように用意しておきます」

「おっけー」

ざっくり周囲を観光した後で彼女が砂浜に降りたいというので堤防の階段から下に下った。真っ白できれいな砂の上を彼女が軽快に歩く。砂の上で楽しそうにくるくると回る様子はなんとも幻想的だった。

彼女を何となく眺めながら、自分の数奇な現状と一人で暮らしていた時のなんともさみしい過去を比較する。周囲の天才から逃げ孤独を選んだ僕だが、誰かと生活するのは何となくあったかい気持ちにな

るものだとは何となく感慨深く思った。

車を再び走らせ彼女の家に帰る。

途中でスーパーマーケットに立ち寄った。夕飯の食材を買うためである。

「何が食べたいとか嫌いなものとかあったりしますか」

「んー辛い物とか好きだけど、基本的になんでも食べられるよ」

「わかりました、では中華とかにしましょうか」

二人でカートを押しながらふわふわした会話を繰り返しているところ、子供のころに親と買い物に行った時の記憶が自然と想起された。

それにしても嫌いな食べ物がないとはさすがのお嬢様だ。普通に生きていたら何となく嫌いなものが生まれるものだろう。かくいう僕もレバーがどうしても食べられない。あのなんとも言い難い歯触りと生臭さが受け付けないのだ。

「じゃ僕はキッチンの掃除をしてから食事の準備をしますね」

「よろしくお願いいたしますーす」

彼女は少しおどけた口調でお礼をしたあと、自分の作業デスクに戻っていった。

自分が捨てたものを拾い上げるような一日になんだか懐かしいような、せつないような、胸が締め付けられるような気分になった。そして家事のやる気を出し、よしつと独り言を言ってみたりした。

キッチンをぎっくりと片付けて調理に取り掛かる。そして予定通り6時過ぎにすべての料理が完成した。

「できましたよ」

「おおー！すっごー！おいしそうー！やっぱりお兄さんを雇った私の目に狂いはなかったね」

「褒めていただいてありがとうございます。では料理が冷める前にたべましょうか」

二人で食事を摂る。会話をしながら食事を摂る。笑顔で食事を摂る…。

映画で描かれるようなささやかな日常がいかに尊いものであるのか、小さな感動の累積として幸せは存在するのだろうかというチープな

感想を抱いた。一つ疑問に思うべきは食卓を囲む二の男女が夫婦やカップルではなく、この前まで配達屋と客で現在は雇用主と家政婦という関係であるということだ。

しかしその異常性すらもどうでもよくなるほどの居心地の良さだった。

特に理由もなく海に行ったり、二人で一緒に食事をしたり。

ああ、幸せだなあ…

臆病者で社会に挑むことから逃げた僕にも注がれる等身大の幸せにおぼれそうになる自分に自分自身で気が付いていた。

第三話

「今日は何をするんですか」

いつもの調子で彼女、広町七深に尋ねる。先日、江ノ島に小旅行をして以降毎日のように二人で様々な場所を訪れた。浅草や横浜など観光地を中心にまさしくデートらしいデートを重ねた。まるで二人のいびつな関係性を取り繕うように。

しかし今日はいつもととは違うようだ。

「ん、なんにもしないよ。そんな毎日遊んでたら疲れちゃうって笑」

「…まあそれもそうですね、お互いやらなきゃいけないことやりつつ、まったりしますか」

「そうしょ。『普通』っぽくていいじゃん」

まただ。彼女の悪い癖。

『普通』という言葉が彼女に好んで使い、彼女自身もそうなりたいと思っているような発言が目立つ。

しかし僕には何となくその言葉に嘘を感じる。手が届かないとわかっていても関わらず、わざと目指すことでおどけているよううすら寒さを感じる。その言葉の裏を知ろうとする勇氣は今の僕にはないのだが。

トン、トン、トン。

キッチンに立ち軽快に包丁を動かす。

今日は作り置きのお惣菜を作るつもりだ。僕が外出しているときに彼女が軽く食べられるものを用意するためである。比較的大型の冷蔵庫には整然と食材や料理が並んでいる。キッチンとラベリングされてどこに何があるか一目でわかるようにしているつもりだ。

判別しやすいことは大事なことだ。少しでも間違いのリスクを減らすことができる。自分もあの天才たちと自分が違う次元にいると判別できなければ今も苦悩の中にいただろう。いまのまどろみのような幸福の中に身をゆだねる環境に存するなど決してかなわないものだったはずだ。

「下ごしらえはこんなものでいいかな」

一息ついた瞬間にふと聞こえるパソコンのタイピング音。誰かが自分と生活圏を重ねている安心感。

笑みをこぼしてまた調理に戻る。

「よっし。今日は品数増やしてみましようか…!」

笑顔はモチベーションへとつながる。

—————

「お兄さんは優しい人なんだろうなあ」

ブルーライトを上半身いっぱいを受け止めながら、彼女は手元を見ることなくパソコンを打ち続け独り言ちる。十本の指が発言とは無関係に動くさまは無機物的ですらあるのだが、その指からはじきだされる利益はすさまじいものである。天才・広町七深にとってどの企業や業界が業績を伸ばすのか数的データから予想するなど造作もないことであり、家事をする時間がいらなくなったことで今まで以上に精度の高い取引が可能になっていた。

「ん…?」

そんな彼女にも合理性からあまりに逸脱した行動、つまり追い詰められた普通の人間の行動はわからないものである。

「うっそ、なんでこんな株が売られてるの?!こんなの大損しちゃうよ〜!」

「これだから株は難しいんだよー!」

恨み言を叫びながら全力でタイピングをする。

唐突に発生した負債に驚く彼女だが即座に立て直しを図る。

刻一刻と値が変化する株式市場においてはほんの数分の油断が命取りとなるのだ。

「むう〜〜〜!!!これでどうだ!だめ?!?」

そんな時後ろの扉が開き、怪訝な顔をした同居人が入ってきた。

彼はふう、と一息つく

「今日は平穩無事な一日になると思っていたのですがね」

そうつぶやいて彼女の代わりにパソコンの前に座り、猛然とした勢

いでタイピングを始めた。

—————

彼が家事をしているときに隣の部屋から聞こえてきた大きな声。

「むう~~~~!!」

そのあまりに唐突さに驚いた彼は思わず菜箸を取り落としそうになった。

「なんなんですか、もう…」

彼女が株の売買によって生計を立てているという事実を彼は知っていた。

そもそも株は緻密な予測力とそれを実現できるだけのデータ収集力、そして時代の潮流を読む力だろう。

彼女が圧倒的に優れているのはまさに、この読みの力である。「何となく」というある意味感触的な部分で株の動向を見極めるのだ。もちろん株の初心者が利益をきちんと出すための方法としてはかなり「普通」ではないはずだ。本来経験によって賄うはずの部分を天性のセンスによってまかなっているというのだから。

逆に彼は少しずつ努力を積んできたタイプの人間である。

自分自身が非凡であることを自覚しているからこそ天才に差をつけられないように自分を律し研鑽できるような人間である。一位になり、絶対的な榮譽を手にするにはできないまでもきちんと評価される立場にいつづける。そこまで努力できること自体が才能だと称してくれる人もいたが、彼にとっては付け焼刃の言葉に過ぎなかった。

まさに月と太陽。陸と海。

互いに必要な、なくてはならない存在なのだろう。

そもそも人間が「誰かがいなくてはならない」という状況が異常であるということに本人たちは気が付いていないのだが。

「この値の動きは…大方、破産しそうな企業が最後に大博打を仕掛けたってところでしょうかね」

「そう…なの…？お兄さんよくわかるね…？」

「大学で経済学をちよつとかじっていましたが、センスないので株には手を出しませんでしたけどね」

「そっか」

どことなく安心したように広町はつぶやく。

—————

「…これで不足分くらいは回収できたはずですね。それにしてもあなたは結構お金持ってるんですね」

驚きをもって彼女に話しかけるが、返事はない。

不思議に思っただけで彼女のほうを振り向くと、

「ぐすつ…ぐすつ…！」

「何泣いてるんですか?!ちよつおなかでも痛いんですか?」

「不安…だった。怖かった…。こんなこと初めてだから、本当に一文無しになっちゃうかと思った…」

彼女は彼に抱きつき、子供のようにぐずり上げる。

自分自身の力による敗北を、本質的な敗北を知らない彼女にとっては衝撃的な体験だったろう。

彼はそんな彼女の頭を優しくなでる。

まるでそうするのが当たり前のように。

はまるべくしてはまるパズルのピースのように。

二人の間にしっとりした、肌にまとわりつくような、粘度を帯びた空気が流れる。

「お兄さん、今日、しよ…？」

「僕も今まさにそう思っていました…」

「もうすべてがどうでもいいや。この人さえいてくれれば」

ああ、また

歪み、朽ちていく。

第四話

「もうすぐ花火大会だね〜」

近くのスーパ―から二人で帰る道すがら、掲示板に貼ってあったポスターを見て彼女がつぶやいた。

市のイメージキャラクターが吐き捨てたくなるほどの笑顔で花火を見ている。

花火はきれいだ。だからこそすぐに消えてしまう無責任な姿にいやな気持ちになる。なんだか肩透かしを食らったような裏切られたような気持ちになるのだ。

「私ね、花火って嫌いなんだ〜」

心の中を見透かされたかのような発言に僕はドキツとした。自分の胸の内をのぞかれているような気持ちになった。

「それは…なぜと聞いても大丈夫ですか…?」

「ん〜、いやなことを思い出しちゃうからかなあ」

「いやなこと、ですか。そういうえば昔のことをあまり聞いたことがないですね」

「確かにそうだね…。何かの機会があったらきちんと話すよ。お兄さんのこともちゃんと教えてね」

「そう…ですね…」

お互いがお互いに後ろ暗い過去を持っていることを何となくわかっている。僕たちはそういう共犯めいた雰囲気を共有しているつもりだ。いたずらをばれないように遂行しようとする時の面白さともスリルともいえないようなあの気持ちを僕たちは持っている。

会話がなくなり、二人で買い物袋を持ちながら帰路に就く。

夕焼けのまぶしさに目を細める彼女が少し泣きそうに見えたのは気のせいだろうか。

「今日は予定通りハンバーグでいいですか?」

僕は彼女が消えてしまうような気がして務めて元気よく切り出した。

「そうだね〜やっぱり洋食の王様はハンバーグだよ〜」

「王様かどうかは主観に満ちているような気がしますが、ハンバーグは確かにおいしいですよね」

「これぞ家庭の味ってやつだよね」

普通であることを追い求める彼女にとって食事も重要な意味を持つのかも知れない。

僕は彼女がなぜ普通でありたいと願うのかは分からないが、彼女が花火について語った時『普通』について話す時の彼女と同じような自傷的な瞳をしていたように感じる。

この夏が僕たちの関係を少し変質させる重要な契機になるような予感がしている。

—————

そんな彼らの背後に煌びやかな金髪をはためかせる女性がいた。

「ふうん、ななみは幸せそうにしてんだね。あたしやふーすけにこんな仕打ちしといて」

予感が、事実には、変わろうとしている。

—————

「ねえねえお兄さくん、なんかして遊ぼうよ」

僕のひざの上でゴロゴロしている彼女、広町七深がだらけきって間延びした甘え声で話しかけてくる。真夏の日差しが部屋の中でさえもとんでもない高温に至らしめている。そんな暑さを気にしないかのように彼女は僕に甘えてくる。

いや、よく見るとかなり暑さは気にしている。薄手のキャミソールと短パンしか身に着けておらず、夏の暑さで火照った頬はなんとも扇情的だ。

「いや、とりあえずちゃんと服着て下さい。仮にも男性と同居しているんですよ」

「ん〜別にいい、お兄さんにだったらおそわれてもいいと思ってるけど」

？」

いたずらっ子のように舌をちろつと出しながらこちらを見つめる

「そんな顔してもダメです」

「けち〜」

他愛ない甘えあい。まどろみのような時間が流れ続けている。

最近は僕も彼女も仕事をおぎなりにしがちで、ひたすら二人でだらけて過ごすという生活を続けている。

節約の名目で一日のほとんどをリビングで二人で過ごし、一緒に映画を見たりゲームをしたりという怠惰なありさまだ。食事など基本的な家事だけは雇われの身としてきちんとかなしているが、それ以外で外に出ることはほとんどない。

お互いがお互いの生活圏にすることに安心を抱いている典型的な共依存。食事の時も洗濯の時も買い物の時も、ひたすらに隣にいつづける。それが僕にとっても彼女にとっても最上級の幸せであり求めていたものだ。一体なぜこれほどの短期間で依存関係に陥ったのかは僕自身にもわからない。もともと客と配達員だった男女がひよんなことから一緒に暮らすこととなり、そして恋人の真似事のようなことを続けだんだんとなじんだ、なじんでしまったのだ。

だがそのような平穏も崩れ去ることになる。

『ピンポン』

滅多に鳴らない広町家のインターホンが鳴った。客人など訪れたことがないのはもちろん、ネットショッピングも注文した商品は全て配達ボックスに入れてもらうようにしている。来るとしたらセールスか怪しい宗教勧誘くらいのものだろうか。

「珍しい。僕が出ますね」

「あ〜ありがと〜」

寝ころんだ姿勢のまま彼女が答える。第一その格好で人前に出られると思っっているのだろうか。

「はい、どなたですか」

僕が小さくドアを開け名前を名乗るよう促すと、その人は奥にも聞こえる自信たっぷりな声でこう言った。

「桐ヶ谷透子です！広町さんの友人です！」

屈託のない笑顔でそう答えた彼女は見るものの目を奪うような美しい金髪をしていた。同時に僕はこんな話を思い出した。『幸福はそれが失われるまでは知られない』セルバンテス

今、幸福が消え去ろうとしていることを確かに感じていた。

—————

「桐ヶ谷透子です！広町さんの友人です！」

やっぱりその名前を聞いたとき感じたのはなつかしさだった。青春の中で苦楽を共にした大切な友人。目標にむかってともに努力した戦友。そして何よりも私が最も欲していたものを持っていたがゆえに、私が最も傷つけてしまった人。

「久しぶりだね、とーこちゃん」

「そうね、本当に、久しぶり。ななみ」

自分でも思ったよりもすらすらと彼女へのあいさつが出てきたことに対して驚いたが、やはり口の中は苦い思い出の味がした。

—————

広町七深にも友人がいたのか、失礼にも最初に思ったことはそんな感想だった。

何事も卒なくこなす彼女は集団の中でも浮いてしまいやすいのだろうとおぼろげに思っていたが、やはり人間関係についてもうまくやっていたのだろう。対して僕はわざわざ訪ねてくるような友人がいないくらいには交友関係が希薄だ。『お兄さん』であるはずの僕がまた先を越されたような複雑な気分だ。

「とーこちゃん、今日は何しに来たの？というか私の居場所、よく知ってたね？」

「ま、あたしの人脈にかかればこんなもんよ。まあ立ち話もなんだし、ちよつとお茶しようよ。ね、お兄さん？」

「…紅茶でいいですか？おいしいクッキーがあるので」

「気が利くじゃん！それでよろしくウー！」

「とーこちゃん、相変わらずって感じだね〜」

紅茶を淹れながら彼女たちの話に耳を澄ませる。聞こえてきた情報によると彼女、桐ヶ谷透子は広町七深の高校時代の同級生らしい。そして二人はバンドを組んでいたという。

「どうぞ。お口に合うかわかりませんが」

「お兄さん、悪いね〜急に押し掛けたのにお茶まで出してもらって！」

きれいな金髪に似合う軽快な口調で桐ヶ谷透子は話す。

「それでさっきも聞いたけど、とーこちゃんはわざわざ何しに来たの？売れっ子モデルの仕事で忙しいと思ってたけど」

「撮影の合間に近くを通りかかったからさ！ちよつと寄ってみようと思っただけ！」

あ、これはいけない。

彼女は嘘をついている。

それも広町七深は嘘であると看破するだろうとわかったうえで嘘をついている。

これ以上は踏み込んではいけない気がする。

聞けば何かが変わってしまう。

「僕はお茶のおかわりに…」

『お兄さん』にも、聞いてほしいな。私たちの過去の話。なんでもないバンドが何かになるうとした空虚なお話を。ね、ななみ？」

広町七深はあきらめたように優しい笑みを浮かべているばかりだった。

僕はただひたすらに、のどが、乾いた。